平成3年(1991年)10月1日　第1号

INFOS
日仏整形外科学会広報誌 アンフォ

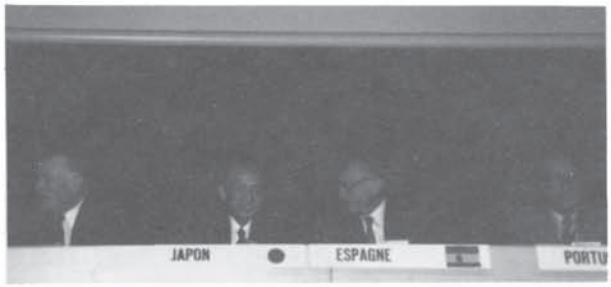
会長　七川歓次
Président: K. SHICHIKAWA
副会長　菅野卓郎
Vice-Président: T. SUGANO
副会長　小野村敏信
Vice-Président: T. ONOMURA
書記長
Secrétaire général: 小林 晶
A. KOBAYASHI
事務局:
大阪医科大学
整形外科学教室内
Tel. (0726)83-1221代表
(内)2364
学会専用Fax. (0726)82-8003
Bureau:
Osaka medical college
Dep. of Orthopedic Surgery
Takatsuki, OSAKA 569 Japan

会長挨拶

AFJOの成立に寄せて

七川　歓次

日仏整形外科学会が設立されたのが今から約3年半前であって、フランス好みの人々の集まりであるから、自由で、こじんまりした同好会のようなものが続くもとの思っていたが、みるみる“立派”になってきて、内心嬉しいことであるけれども一寸驚いている。これというのも、日本的能率のよさというより世話人の方達の協力の賜という感じがしている。



小林晶先生、菅野卓先生と日仏整形外科学会設立に動き出したのが昭和61年秋頃で、第1回学会が翌年11月、神戸国際会議場で開催された。この時は総会の後、ツールーズ大学リウマチ学のArlet教授に学会発足の記念講演としてhyperostosisの話をして戴いた。同教授は骨循環の仕事の関係で阪大の小野教授が招待されていたのを、私の旧知の人でもあり、特にお願いして参加してもらったものである。

第2回の翌年の東京での会では、小林先生が病気で欠席されたので、何もかも菅野先生のお世話になった。先生が副会長をしている日仏医学会の会長の國重信彦先生にも出席して戴いた。また招待したツール大学小児整形外科Glorion教授の特別講演「Illizarov法による下肢延長術」の通訳も菅野先生にお願いした。この頃会員は約100名に達していた。

とも角会は体裁を整えてきたようであったが、会員にフランス人整形外科医が入ってほしいとかねがね思っていた。それには我々が出かけていって、先方の学会の折に日仏整形外科学会を催し、会員を勧誘するのが一番の早道ではないかと考えた。丁度次回の1989年はフランス革命200年祭にあたり、学会が同じ頃に開かれるので、この機会を利用しようと思い、会長のRoy－Camille教授と小林先生にお骨折り願ったが、準備の余裕がなく、一年延期することになった。この頃小野村教授およびその門下の瀬本喜啓先生の留学先であったリヨンのPicault先生とKohler先生のお世話で、日仏の若い整形外科医の交換研修の話し合いが成立し、小野村教授のご尽力によって、日本側の代表機関として日仏整形外科学会がこれにあたることになった。また同教授を通じて日本整形外科学会の承諾を得、委任される形となった。こうしてにわかに当学会が、同好会的なものから公的な色彩も帯び、フランス側との接触が格段に緊密なものとなってきた。

一方懸案である1990年のパリーでの日仏整形外科学会の企画の方は、それを進めるにあたって、実務もやってもらえるパリーの整形外科医が必要なため、旧友のPostel教授に相談し、コシヤン病院の彼の弟子であるCourpied教授を推薦して戴いた。このようにして、1989年の末には、リヨンのPicault、Kohler両先生とCourpied教授とで、我々の学会に対応できる組織がフランス整形外科学会内にでき上がることになった。その上、1990年のSOFCOTの会長がリヨンのMichel教授であること、Michel教授と小林先生とがともにTrillat教授の弟子であることも幸いして、我々のパリーでの日仏整形外科学会の開催準備は思いの外順調に進んでくれた。またPicault先生を小野村教授が人工関節学会の特別講演に招待されたのを機会に、昨年2月には小林先生を交え、パリーでの学会の打ち合わせを行うことができた。

その後フランス側との連絡で、この両国の整形外科外科医からなる会をAssociation France Japon d'Orthopedie、略称AFJOと称すること、2年に一度交互

にお互いの國で学会を開催すること、交換研修医の派遣の世話をすることなどが合意され、パリーでの学会直前の役員会で決定された。次回は1992年10月京都でこの会がもたれることになっている。

パリーでのSOFCOT学会前日（1990年11月12日）午後から行われたAFJOは文字通りの盛況で私は胸をなでおろした次第である。日本から15の発表があり、仏英同時通訳がなされ、それぞれの演題にフランス側から著名な整形外科外科医がmoderator として配置され、司会をし、質問やコメントを行う形式がとられた。私の旧知のパリーの代表的な整形外科外科医がほとんど顔をそろえていたのには私は心底感激した。会場は溢れるばかりの人であった。

日本側の今回の参加者は45名で、この会の前日には日本のルセル・メディカの親会社からの歓迎パーティーがもたれた。ルセル・メディカはこれまで日本での学会に後援して戴いていたので、このご好意にあらためて御礼申し上げたい。またこの多人数の旅行者の編成企画には随分と小林先生に御苦労して戴いている。なおフランス側の会の準備にPicault 先生ご夫妻の並々ならぬご尽力のあったことを聞いており、ひいては小野村、瀬本両先生のご努力のお蔭であると感謝している。

開会はMichel 教授の司会でCourpied 教授と私とが挨拶し、続いてCourpied 教授の司会の下で学会発表に移った。各発表はいずれも力のこもったもので、基礎的なすぐれたものもあり、フランス側の興味と称賛を聞かされたが、お世辞ばかりではないと思う。最後に小林先生が流暢なフランス語で自身の留学の経緯や謝辞のみならず、個人的な感慨を交えて日仏整形外科の交流について熱のこもった話をされ、聴衆に深い感銘を与えたようであった。

この日、日本のフランス大使の出席も予定されていたが、丁度天皇の即位の日にあたり、帰国されていて欠席された。この後我々のために歓迎パーティが催された。翌日SOFCOTが開会され、開会式とセレモニーとして、外国から30数カ国（と思える）各国の代表者が壇上で一同に会し挨拶する場面があり、私の近くにいたスペインやモナコの代表者が天皇の即位の儀式をテレビで見た感動を語りかけてきた。このAFJOの学会は何から何までまことに印象深いものとなったが、見事な共同作業の傑作のように思われ、今後日仏交流に果たす役割は大きいと考えている。

第１回AFJO（日仏整形外科協議会）第65回フランス整形災害外科学会（SOFCOT）に出席して

福岡整形外科病院
院長　小林　晶

わが国の整形外科医の中でかってフランスに留学した人や関心のある人の間で、両国間の交流を行おうとの機運が生じ、第１回日仏整形外科学会の設立総会が行われたのは1987年11月６日（神戸）であった。以後第２回が1988年10月29日（東京）と11月２日（京都）の両日に、第３回が1989年11月11日（大阪）でそれぞれれ行われ大成功をおさめた。

この後わが国でだけではなく、フランスでもこの会合が可能であれば交流の輪を広げるためにも好都合だし、わが国の整形外科の水準を知って貰うためにも実現したいとの構想が生じた。折り良く第65回フランス整形外科学会（SOFCOT）の学術総会会長である、Dr. C. PICAULTを小野村敏信教授が主催された人工関節研究会に招待されたので、計画はとんとん拍子で進み、第65回SOFCOT（1990年11月13日－16日）に関連づけて開催することに決定した。

それから慌ただしく演題募集と会告を日仏整形外科学会会員はもちろん、各大学の教授、医局長にも送り周知方を依頼した。

会員の努力もあって15題もの演題が日本全国より集まり、事務局としては一安堵した次第であった。演題の内容も各専門分野にまたがり、分散していた。

その後英仏同時通訳の原稿のやりとり、JTBに依頼したツアーの募集、フランスとの細部にわたっての交渉などFAX、電話がフルに活用された。

フランス側もSOFCOT会員への周知、会場の設定、modérateur の選定、レセプションの準備など大変苦労されたようである。この間の苦労話はフランス側の世話役として活躍された小森・ジラン敬子さん（Lyon 在住）にあとで伺うとフランス側の熱の入れようはなみなみならぬものがあって、障害も多かったらしい。

このようにして総勢35名の医師と10名の同伴者のグループが旅立ったのは1990年11月10日であった。すでにフランスに滞在する医師や英国留学中の医師を加えて、全員の顔見せディナーパーティが会の前日Eiffel 塔の中２階にある〈La Belle France〉で行われた。夜景を見つつ一大グループが席を占める有様はかなり異様なものであったかも知れないが、大いに盛り上がってフランス料理を満喫した。

11月12日に行われた会合はAssociation France Japon d' Orthopédie（A. F. J. O.）と命名され、午後

2時より開会された。

まず、Prof. J. P. COURPIEDの暖かい歓迎の挨拶で始まり、わが国を代表して七川歓次会長が答礼の言葉を続いて述べた。

学術演題の総合司会をDr. R. KOHLERが行う予定であったが、都合で出席できずProf. J. P. COURPIEDが代行した。

日本側の演題は別表（表1）のように進められたが、大変フランス側の意気込みを感じたのは、フランス側のmodérateurとして第1線の高名な学者がそれぞれの演題に付いていたことであった。日本で開催するとき、わが国の第1級の整形外科医を1日1堂に集めることを想像すると、フランス側の配慮がさらに大きなものとして感じられた。SOFCOT会員の出席者は150名の多数であった。

PREMIERE REUNION DE L'ASSOCIATION FRANCE-JAPON D'ORTHOPEDIE

(A. F. J. O.)

LUNDI 12 NOVEMBRE 1990

PALAIS DES CONGRES

PARIS

PROGRAMME

Nous remercions les sociétés suivantes qui ont permis l'organisation matérielle de cette réunion :
- Société LECANTE
- Société PROTEK
- Société LANDANGER
- Société VECTEUR ORTHOPEDIC

表1．A

14 H 00 OUVERTURE DE LA REUNION

1) Accueil par le Pr J.P. COURPIED, Vice-Président de l'A.F.J.O. en France.
2) Allocution du Pr K. SHICHIKAWA, Président de l'A.F.J.O. au Japon.

14 H 30 SESSION SCIENTIFIQUE
(Président de séance : R. KOHLER, Secrétaire de l'AFJO))

1. Arthroscopie dans les lésions du poignet.
NISHIKAWA S., HOSHI T., TOH S., HARATA S. (HIROSAKI)
Modérateur : J.J. COMTET (LYON)

2. Premiers résultats d'une expérience japonaise du brochage intra-focal selon Kapandji dans le traitement des fractures du poignet.
SHIOTA E., HAGA B., KUGA Y. (KOKURA)
Modérateur : J. H. AUBRIOT (CAEN)

3. Réduction orthopédique des fractures supracondyliennes de l'humérus chez l'enfant (utilisation d'un nouvel appareillage).
KUBOYAMA K. (SHIZUOKA)
Modérateur : H. BENSAHEL (PARIS)

4. Etude biomécanique sur la pathogénie des lésions du "coude de base-ball".
HATA M., HUKUDA S. (OHTSU)
Modérateur : J.Y. ALNOT (PARIS)

5. Coxopathie associée à une hyperostose vertébrale ankylosante
TAKENAKA Y., MOROGA M., SHICHIKAWA K., INOUE K.,NISHIOKA J., ASAJIMA S., FUKADA S. (OHTSU)
Modérateur : M. POSTEL (PARIS)

6. Analyse de la marche chez les coxarthrosique.
SUZUKI M., YAMAZARI N. (TOKYO)
Modérateur : J. P. COURPIED (PARIS)

7. Etude histologique des effets de la sérotonine dans les lésions aiguës de la moëlle épinière chez les rats.
SARUHASHI Y., FUKUDA S., MAEDA T. (OHTSU)
Modérateur : L. TEOT (MONTPELLIER)

表1．B

8. Etude scintigraphique et traitement des métastases vertébrales des tumeurs malignes.
ONOMURA T., WATANABE H., MIYAJI Y., SEMOTO Y., MORISHITA S., INOUE T. (OSAKA)
Modérateur : R. ROY- CAMILLE (PARIS)

16 H 30 PAUSE - COFFEE BREAK

17 H

9. Allogreffes du disque intervertébral chez le chien.
KATSUURA A. FUKUDA S. (OHTSU)
Modérateur : J. WITVOET (PARIS)

10. Traitement chirurgical des subluxations cervicales dans la polyarthrite rhumatoïde.
FUKUDA S., OGATA M., KATSUURA A. (OHTSU)
SHICHIKAWA S. (MIE)
Modérateur : A. DEBURGE (CLICHY)

11. Lésions discales dans le syndrôme de Behcet et syndrômes similaires.
AMANO K., MIYAWAKI Y., DOI T., TSUJIMOTO M., TANI Y., KITA S (OSAKA)
Modérateur : I. KEMPF (STRASBOURG)

12. Résultat de la reconstitution du ligament croisé antérieur en utilisant la bandelette de Maissiat.
NISHIYAMA H., MORITA H., TSUCHIYA A. (CHIBA)
Modérateur : D.GOUTALLIER (CRETEIL)

13. Reconstruction des ligaments croisés antérieurs par la méthode de Dejour.
SAKAGUCHI M., OHIRA T., IKUTA T. (KUMAMOTO)
Modérateur : H. DEJOUR (LYON)

14. Traitement des lésions ligamentaires complexes du genou.
OKADA Y., OCHI M., SUMEN Y., DEIE M., IKUTA Y. (HIROSHIMA)
Modérateur : P. CHAMBAT (LYON)

15. Réparation non chirurgicale de la rupture aiguë des ligaments croisés et ménisques du genou.
IHARA H., MIWA M. (KOKURA)
Modérateur : B. MOYEN (LYON)

表1．C

18 H 45 Conclusion de la séance scientifique
(Docteur Ch. PICAULT, Président de l'A.F.J.O. en France et Président du Congrès français 1990)

19 H 00 Cérémonie officielle
en présence de son Excellence l'Ambassadeur du Japon :
1) Discours de l'Ambassadeur du Japon.
2) Intervention du Docteur Akira KOBAYASHI, Secrétaire Général de l'A.F.J.O. au Japon au sujet de la création de l'A.F.J.O.
3) Allocution du Professeur C.R. MICHEL, Président d'Honneur de l'A.F.J.O. en France et Président de la SOFCOT (1990).

19 H 30 Cocktail
Tous les congressistes (et leurs épouses), et les personnalités sont invitées à y participer.

表1．D

ひとつひとつの演題の模様をここに詳述する紙面の余裕は無いが、英仏語の同時通訳を介して発表と討論が続けられた。フランス側の質問はかなり鋭く微細であり、日本側の応答も適確であった。こうゆう会合のときどうしてもお互いの言語のバリヤーが多少生ずるのは、止むをえない。2－3のやりとりの中で齟齬があったが、これはコーヒーブレークやレセプションのときすっかり解決したようである。

フランス側の印象は演題のレベルが“assez haut niveau”という言葉を耳にし、1番新しいSOFCOTのB. O. F. (Bulletin des Orthopédistes Francophones)の中でもDr. PICAULTが“le meilleur niveau”と書いてくれているのでも、客観的評価としては満足のゆくものであったようだ。

しめくくりはDr. PICAULTが行い、閉会式となった。駐仏日本大使が出席予定であったが、おりから行われた即位の礼の行事のために出席できず、SOFCOT理事長Prof. C. R. MICHELの日仏間の初の試みの成功のお祝い、今後の課題としてさらに発展を促すためのお互いの努力を強調する挨拶があった。続いて七川歓次会長、小野村・菅野両副会長および筆者が壇上に並びそれぞれがお礼の言葉を、筆者がこの会合ができあがるまでの経緯を報告した。

予定された時間を遥かにオーバーして無事AFJOの公式行事は終了した。

興奮も覚めやらぬうちにすぐカクテルパーティーが隣室で行われた。今までの講演、討論とうって変わって、寛いだ雰囲気の中で両国の出席者がグラスを手に歓談した。この席では個人的に若いフランス人医師から筆者は日本への留学についての希望を多く聞いた。すでにご承知のようにSOFCOTとの合意が成立して、若い医師を両国間で交換させる制度が発足し1990年に第1回の留学生がわが国にもやって来て、その印象がきわめて良く、日本を称賛していたのでさらに希望が多くなっているようだ。

最後に午後8時過ぎよりConcorde－Lafayetteホテル内のレストランで、参加者全員のディナーパーティーが行われた。10テーブル以上が配列され、主催者の配慮で日仏会員が交互に座るように決定されていた。談論風発、和気藹々の中に終わったのは午後11時近くであった。

翌11月13日よりSOFCOTの学術集会が4日間の会期で始まった。SOFCOT学会は例年この時期と春の2回行われるが、秋のが最も重要である。プログラムの特徴は第1回目の午前中がすべて研修会にあてられること、シンポジウムが2題あって1つは整形外科、他の1つは外傷外科にあてられ、開会式と同時に記念講演が行われることなどである（表2）。

PROGRAMME SCIENTIFIQUE

SYNOPSIS	mardi 13 novembre	mercredi 14 novembre	jeudi 15 novembre	vendredi 16 novembre
Matin	Salles Bleue, 53 ab, (Niveau 5) Havane, 62 ab (Niveau 6)	Grand auditorium (Niveau 4)	Grand auditorium (Niveau 4)	Grand auditorium (Niveau 4)
	8 h 30 - 13 h 00 Conférences d'enseignement	8 h 30 - 12 h 00 Symposium Traitement des inégalités de longueur des membres inférieurs et des sujets de petite taille chez l'enfant et l'adolescent. Directeur : J. Caton (Lyon) *Traduction simultanée en anglais.*	8 h 30 - 12 h 00 Symposium Traitement des ruptures ligamentaires fraîches du genou Directeur : J.C. Imbert (St-Etienne) *Traduction simultanée en anglais*	8 h 30 - 10 h 00 Quoi de neuf en rhumatologie Sous l'égide de la Société Française de Rhumatologie (Président : P. Deshayes) Directeur : J.M. Thomine (Rouen) 10 h 30 - 12 h 30 Communications particulières
Après-midi	Grand auditorium (Niveau 4)	G.A. (Niveau 4) / Salle Bleue (Niveau 5)	Salle Bleue (Niveau 5)	G.A. (Niveau 4) / Salle Bleue (Niveau 5)
	14 h 30 - 16 h 30 Séance d'ouverture de la 65° Réunion « Allocutions des Présidents Conférence : Professeur Roger Guillemin, Prix Nobel de Médecine "Hormone de croissance. Facteurs de croissance, os et cartilage. 17 h 00 - 18 h 00 Communications particulières	14 h 00 - 18 h 00 Communications particulières et réunion commune avec le Comité de Coordination des Sociétés d'Orthopédie et de Traumatologie des Pays du Marché Commun Européen (COCOMAC) Luxation récidivante de la rotule. *Traduction simultanée en anglais.* 14 h 00 - 18 h 30 Communications particulières	14 h 00 - 15 h 00 Assemblée Générale de la SO.F.C.O.T. G.A. (Niveau 4): 15 h 30 - 18 h 00 Communications particulières Salle Bleue (Niveau 5): 15 h 30 - 16 h 30 Assemblée Générale du Syndicat National des Chirurgiens Orthopédistes et Traumatologues 16 h 30 - 18 h 00 Assemblée Générale du Collège Français des Chirurgiens Orthopédistes et Traumatologues	14 h 00 - 18 h 00 Communications particulières 14 h 00 - 18 h 30 Communications particulières
	Cocktail	VIDEOTHEQUE	VIDEOTHEQUE Dîner de la 65° Réunion	

表2.

本年度の参加者は2285名でうち外国からの参加者は988名であった。会長（わが国の理事長にあたる）はProf. C. R. MICHEL、学術会長はDr. C. PICAULTと奇しくも両者ともécole lyonnaiseである。

第1日目冒頭の研修会は4ホールを使用して午前8時半より正午まで1時間毎に講師、テーマを変えて、合計16項目について実施された。筆者は『手根不安定症』と『肩部麻痺の再建』を聴いた。わが国と同じように関心が高く、400名に近い聴衆で超満員であった。基本的な解剖と生体力学を詳細に導入部で述べ、これまでに発表されてきた内外の治療法と私見が展開される。フランス人らしく演者の熱演で時間が超過してなかなか討論時間がとれない。しかし、解り易くしようという努力がせいいっぱいなされていた。

開会式が午後行われ参加各国代表が舞台に並んで紹介された。わが七川会長はAFJOのためか、中央に座席を用意される光栄に浴した。

その後MICHEL会長の基調演説に続いて、ノーベル医学賞授賞者のProf. Roger GUILLEMINが『成長ホルモン、骨軟骨の成長因子』と題して記念講演を行った。

一般演題の終了後、場所を変えて夕刻より新しいDéfenseのGrande Archeの最上階で歓迎カクテルパーティーがおこなわれた。七川会長以下われわれもこれに参加し、SOFCOT会員のみならず外国から参加した人達との交流を楽しんだ。Le Mondeの記者からインタビューを受けたり、Arc de Triomphe de l' Etoileを通してCarrouselまで一直線に見通せる夜景は、われわれを感嘆させずにはおかなかった。

第2日目、シンポジウム『脚長差および低身長の小児に対する脚延長術』が行われた。

今年が例年に比べ最も特異な点は、EC各国間の統合に向けてEC内各国の代表者を招いてsessionがもたれたことである。これはCOCOMAC（Comité de Coordination des Sociétés d'Orthopédie et de Traumatologie des Pays du Marché Commun）と名ずけられた共同体が行うもので、『習慣性膝蓋骨脱臼』をテーマにして開催された。参加国はイタリア、スペイン、ベルギー、オーストリア、オランダ、ドイツ、イギリスそしてフランスの8カ国から17題提出され、言語は英仏語の同時通訳がついていた。

3日目のシンポジウムは外傷外科のもので『新鮮膝靱帯損傷の治療』であった。

4日目のトピック・セッション（Quoi de neuf？）はリウマチ類似疾患がえらばれた。これはわが国の演題の傾向とまったく異なり、腰痛や各種の疼痛性疾患の保存的治療を行うリウマチ学での最新の動向を知るために行われるセッションである。このプログラムの中のラウンド・テーブルに『椎間板ヘルニアの治療』があるところなど、わとが国とは事情が異なる整形外科学とリウマチ学の領域が伺える。

一般演題は80題あり4日間に分散され、演説時間8分、討論5分であった。演題の中で特徴があるのは、小児整形外科関係が多いこと（15題）、脊椎関係が少ないこと（10題）などであろう。筆者が今年提出した演題がプログラム委員会により運よく採択され、演者らが試みている『Condyloplastie externe du fémur pour l' instabilité fémoropatellaire』を述べた。

その他ビデオ演題（vidéothéque）が59題あった。

わが国と同じように器械展示に93社が参加し、色彩豊かに展示のレイアウトに工夫がこらされている。昼食時ワインが見学者に無料で振る舞われるのがいかにもフランスらしい。

紙数の都合で駆け足での学会印象記に終わったが、SOFCOT会員以外でも1,900フラン（約53,000円）の登録料を払えば出席できることをお知らせしておきたい。

最後に今回のAFJOを成功させるためにご尽力を戴いたProf. C. R. MICHEL, Dr. C. PICAULT, Dr. R. KOHLER, Prof. J. P. COURPIED, SOFCOTの各メンバー、Lyonに居を持って連絡役を引き受けて下さった小森・ジラン敬子さんに心からなる感謝の念を捧げる。

なお次回のAFJOは1992年わが国において行われることが決定している。多数の参加をお待ちする次第である。

第1回AFJO会場にて

右より七川歓次先生、小野村敏信先生、菅野卓郎先生、小林晶先生

第1回日仏整形外科学会青年整形外科医交換研修プログラムに参加して

新河端病院　整形外科
稲毛　昭彦

1991年2月14日から4月15日までの2ケ月間に、第1回交換研修医としてLyon 市のClinic du Parc関節外科部長Dr. G. Gacon氏、Paris 市のHôpital Saint Louis教授J. Witvoet氏のもとで各々1ケ月間研修を受けて参りましたので、興味深かった点について紹介します。

まず最初に、Clinic du Parc はprivate hospital（日本で言う私立病院）、Hôpital Saint Louis は国立病院という違いがありましたので、設備やstaff などの点でかなりの違いがありました。というのも、France でも国立病院の方がもちろん設備自体は大規模なのですが、建物が古いせいかClean room といわれる部屋ですらこのような環境下で人工関節が施行されてinfection は大丈夫だろうかと不安に思えてしまう程でした。一方、Clinic du Parc は創立が1978年ということもあるのでしょうが最新設備を整えており清潔な感じでした。Staff に関しては、さすが国立病院の方が充実しており、Witvoet 主任教授の元にChristel, Seddel の2人の教授がおられその下に4人のChief doctor、そして10人程のintern が80ベッドの患者を管理しておられたのに対し、Clinic du Parc は6人の整形外科専門医が60ベッドの患者を担当しておられ、手術は医学部5，6年の学生をassistant につけてだいたい2人で手際よくされていました。最初は学生と気が付かないくらい彼らはよく教育されており、術前のpositioningや患肢の前処理などを完璧にこなし、術中もよく術者とdiscussion していました。彼らが、医学部の5年から午前中は手術助手として研修に、午後から講義という形式で学んで来ていることを知り納得がいった次第です。

さて、今回の研修目的はFrance における関節疾患の治療（特に膝十字靱帯損傷について）を見聞してくることでしたので報告します。

Clinic du Parc では1980年よりDacron 人工靱帯に始まり、現在ではscafford 型ABC（Active Bioprosthesis Composite, Surgecraft 社）などの人工靱帯を30才以上でスポーツ活動の余り高くない症例を選んで過去12年間に1,845例（ACL損傷3,199例中）も施行されていました。Dr. Gacon は初期の頃のprosthesis には断裂、synovitis などの合併症があったが、最近はこれらの合併症もなく適応を選べば人工靱帯も良いだろうとおっしゃっていました。また、私の見た限りでも鏡視下に行う人工靱帯が手技的にも後療法の面からも簡単で、スポーツ競技者でない限り5年間という短期成績ではあったが充分に制動効果があるように見えたのですが、sports activity の高い人にはfascia lata を利用したMcintosh法に準じた方法でのほうが長期成績は良いのではなかろうかと、彼と一緒に長期follow up 例を診察した後に述べられていたのが印象的でした。

一方、Hôpital Saint Louis では人工靱帯に対し全く批判的であり、augmentation としてLIG AIDS という数ケ月で溶解する靱帯を採用していました。理由としては、膝疾患の重鎮であるProf. Dejour にも尋ねてみたのですが、やはりprosthesis のloosening や断裂が長期的にみると必ず生じてくるからということでした。

私が研修期間中に特に印象に残ったことは、各施設毎にoriginal のprosthesis を開発しており、また手術手技に関しても自分たちの方法がbest であるということをしっかり説明できる理論を持っているという点でした。われわれ日本人は、copy しそれを改良するのはあらゆる分野で非常に上手であり世界的にもその技術の高さは評価されていますが、創造性に乏しいという点を改めて認識させられました。

最後に、この研修参加を実現させて戴き多大なるご援助を戴きました七川歓次先生、Picault 先生はじめ関係各機関の先生方に、この場をお借りして感謝致したいと思います。

AFJOの在仏公式連絡員ジラン夫人のご紹介

日仏整形外科学会の事業の一つに、AFJO（日仏整形外科協議会）の活動があります。このAFJOの日仏役員会において、Lyon 在住のジラン夫人（Mme GIRIN－KOMORI Keiko）をAFJOの公式な連絡員としてお願いすることになりました。ジラン夫人は元日本航空のスチューワデスをされており、金融関係のお仕事をされているご主人の故郷Lyon で、AFJOの役員の一人であるKohler先生とお知り合いになられ、日仏の文化的な交流に役立ちたいとボランティアでいろいろな連絡業務をお手伝い下さっています。昨年パリで開かれた第1回AFJO会議では会議開催までの数多くの連絡業務に加え、同時通訳の打ち合わせや日本人参加者のこまごまとしたお世話をして頂きました。今後フランスと密接な連絡を取る上で非常に心強い存在で、渡仏される先生方の中にはお会いになる機会のある方も多いかと思いますので紙面をお借りしてご紹介しました。住所は下記の通りです。

Mme. GIRIN－KOMORI Keiko　20, rue de Prieuré 69130　Ecully FRANCE

会費納入のお願い

本会の会費をまだお納めいただいていない先生方には本年度の会費3,000円をお納め頂きますようお願い致します。

本会は年会の開催や仏人招待講演、交換研修等多くの事業を行なっておりますが、会員数は約100名と少なく、会の運営には会員の先生方のご支援とご理解が不可欠です。この事情をご理解いただき、早急に納入下さるようお願い致します。また、日仏の整形外科学領域の交流や文化交流等に興味をお持ちの先生がおられましたら、是非入会頂けますようお誘い下さい。

振込先：住友銀行　高槻支店　普通口座　1520174
三和銀行　高槻支店　普通口座　3678633
大和銀行　高槻支店　普通口座　4926601
住友信託銀行　高槻支店　普通口座　6940520
口座名義：日仏整形外科学会 代表 小野村敏信

第4回日仏整形外科学会開催のお知らせ

下記のごとく第4回の日仏整形外科学会を開催致します。

日　時：平成3年11月9日（土）午後4時より
（第18回日本股関節研究会第2日目終了後）
場　所：大阪コクサイホテル
大阪市中央区本町橋2－33
招待講演：Prof. J. P. COURPIED
（日整会教育研修1単位）
（Hôpital Cochin, Paris）
"Total hip arthroplasty on ankylosed hips"

事務局移転のお知らせ

本年1月より、本会の事務局が大阪医科大学整形外科学教室に移転しました。

今後入会手続きや青年整形外科医交換研修の申込等、すべての業務を当事務局で行います。住所と電話番号は下記のとおりです。学会専門のFAXも設置いたしましたのでご利用ください。

住所：大阪府高槻市大学町2－7
大阪医科大学整形外科学教室内
日仏整形外科学会事務局
電話：0726－83－1221（内線）2364
FAX：0726－82－8003
お問い合わせは瀬本又は澤田まで

日仏整形外科学会 青年整形外科医交換研修 プログラムへの参加希望者募集

日仏整形外科学会では、フランス整形外科学会（SOFCOT）との間で青年整形外科医の交換研修を行います。研修条件、応募条件等は下記のとおりです。申請書の請求および詳細については下記までご連絡下さい。

1）募集人員　若干名（平成4年度）
2）応募条件　日本整形外科学会の認定医であること。
原則として40才を応募年齢の上限とします。
その他の詳しい条件は事務局までお問い合わせ下さい。
3）研修条件
① 滞在期間は3か月間を原則とする。
② 費用について
a）渡航費用の一部を日仏整形外科学会が援助する。
b）フランス滞在中の宿泊費と食費はSOFCOTが負担する。
③ 本年度の研修開始時期は平成4年度中とする。
④ 研修を希望する分野に応じてSOFCOTが研修施設を推薦する。
4）申請締め切り　平成3年11月末日
5）申請書式等については事務局までご請求下さい。

日仏整形外科学会青年整形外科医交換研修プログラムによる日仏両国の交換研修医の紹介

日本側の平成２年度および３年度の交換研修医は審査の結果次の３名の先生に決まりましたのでお知らせします。

第一回（平成２年度）
稲毛昭彦先生　昭和31年３月24日生
　勤務先：新河端病院
　留学先：Clinic du Parc (Lyon)
　　Hôpital Saint Louis (Paris)
　　平成３年２月よりDr. Gacon のもとリヨンのパーク病院、Pr. Witvoet のもとパリのサン・ルイ病院で各々１カ月間研修をうけられました。

第二回（平成３年度）
末松典明先生　昭和28年12月９日生
　勤務先：北見赤十字病院
　留学先：Institut Français de la main (Paris)
　　平成３年９月より２か月間の予定でPr. Tubiana のもとパリのフランス手の外科センターで研修中。

三輪　隆先生　昭和29年３月15日生
　勤務先：帝京大学溝口病院
　留学先：Hôpital Cochin (Paris)
　　Pr. Courpied のもと平成４年１月より３か月間、パリのコシャン病院で研修の予定。

なおフランス側は第一回の交換研修医としてDr. Collet（コレ先生）が来日され、平成２年９月より２か月間、大阪医科大学（２週間）、滋賀県立小児保健医療センター（２週間）、福岡市立こども病院感染症センター（４週間）と３施設で研修を積まれました。本年度はDr. Liverneaux（リベルノー先生）が10月より２か月間、広島大学および京都府立医科大学で研修することが決まっております。また、既に来年度の研修予定者はDr. Chassard（シャサール先生）に決定しており、現在受け入れ施設を検討中です。受け入れ施設の諸先生方に深くお礼を申し上げるとともに、今後とも会員の先生方のご支援をお願い致します。

第２回AFJO（日仏整形外科協議会）開催のお知らせ

来年10月に２nd AFJO meeting を京都で開催します。フランス側からは約15題の演題を予定しております。日本側も同数の演題を採用する予定です。演題募集を下記の要領で行いますので、奮って御応募下さいますようお願いします。

日　　時　平成４年10月４日（日）　午後９時から
場　　所　京都会館（予定）
締め切り　平成４年６月末日

発表は英語又はフランス語とします。演題名、演者、所属、連絡先を明記のうえ、400words 前後の英文又は仏文の抄録を事務局までお送りください。演題の採否は役員会にご一任下さい。事務局の住所は巻末にあります。

なお会の前日（10月３日）の夕方にはwelcome party を、学会終了後には懇親会を予定しております。詳細については後日連絡いたします。

編集後記

日仏交換留学生の募集も今年で３回目を迎えた。毎回多数の応募があり、若手医師のフランス医学に対する関心の強さに驚くとともに、日仏の橋渡し役をと考えている事務局の一員として身の引き締まる思いがする。フランスの医学は、アメリカを中心としたアングロサクソンの医学に決して追随することなく常に独創的なアイデアを持ち続けており、我々の学ぶべきところは大きいように思われる。

ようやく念願であった学会の広報誌第一号を発刊できる手はずが整った。なかなか要領を得ず苦心したが、本学会の目的の一つである会員相互の交流と親睦をはかる一助になるため今後さらに充実させていきたいと思う。

大阪医科大学整形外科　澤田　出

監　　修　七川歓次
発行責任者　小野村敏信
事 務 局　大阪医科大学
　整形外科学教室内
　Tel (0726) 83－1221 代表
　　(内) 2364
　学会専用Fax (0726) 82－8003